

# アルスター・ボーイズ:北アイルランドのプロテスタントコミュニティにおけるマスキュリティについての考察

アラン・ベアナー(ラフバラー大学・UK)

## イントロダクション

MacInnes (1998:2)によれば、「マスキュリティは、属性や性格特性、個々人のアイデンティティの諸局面として存在するのではない」。むしろ、「それは近代化の進展によって家父長的性別分業の生き残りを突きつける脅威の結果として、男性が生み出したイデオロギーだ」(p.45)。よく知られた「マスキュリティの危機」の影響を強調しすぎるとはいえ、多くの男性 male(あるいはより正確には男 masculine)のアイデンティティの伝統的な源泉が、西洋社会のいたるところで浸食されてきているということは、反駁できない(Seidler, 1997)。このことは、マスキュリティの構築の新しい源泉が見つけれられるということではない。また、男性がそれ以前には全くアイデンティティの葛藤を経験したことがないということを暗に示そうというわけでもない。この講義では、北アイルランドのプロテスタントコミュニティを背景としたマスキュリティの構築と葛藤したアイデンティティの問題について議論する。まず一般的な考察から始め、次に3人のアルスター<sup>\*1</sup>のプロテスタント、そのうちの2人はスポーツ選手であるが、かれらの軌跡と、それぞれの矛盾したアイデンティティへの取り組みについて議論するとしよう。

Sugden (1996:129)は、ボクシングについての社会学的研究において、北アイルランド、もっとも著しくは首都であるベルファストだが、常に「屈強な男 hard men」の故郷であると見なされてきたと記している。Sugdenによれば、1950年代以前の「屈強な男」は、造船所や繊維工場 mills、製造所などで働いていた。かれらは、プライドの高い、身体的にタフで、職場のそとの大衆娯楽へも長い影を落とす、排他的に男性支配的な文化をもっていた。Sugdenは、繊維工場では長年女性労働が多かったという点では、間違っていた。しかし、彼は、次の点では正しい。すなわち、北アイルランドの、とりわけプロテスタントあるいはユニオニスト<sup>\*2</sup>コミュニティ内部において、マスキュリティの社会的構築の点で造船所の重要性に注意を向けたことである。彼はまた、次の主張においても正しい。すなわち、長い間に、伝統的な「屈強な男」が、少なくとも労働者階級のイコノグラフィーにおいて、民兵組織に置き換わったのである。再び、このことはとりわけ、労働者階級のプロテスタントあるいはロイヤリストのコミュニティにとっては真実である。アルスター防衛協会(UDA)<sup>\*3</sup>やアルスター義勇軍

---

\*1 アイルランド島は4つの地方(Province)で構成される。連合王国である北アイルランドにはその一つアルスター地方の6県(County)が属する。残りの3県はアイルランド共和国となる。

\*2 北アイルランドにおいて、連合王国への統一の維持を望む人々をユニオニストと呼ぶ。ロイヤリストも同様だが、ユニオニストのなかの過激派を指すことが多い。

\*3 UDA:1971年設立、ロイヤリストの民兵組織。アイルランド共和国、イギリスではテロリスト集団と指定。UVF:1966年設立、ロイヤリストの民兵組織。アイルランド共和国では非合法とされ、イギリス、アメリカにおいてはテロリスト集団と指定。

(UVF)のような主要なロイヤリストの集団は、常に思想家にとってよりもボディビルダーにとってより魅力的だったし、そのためそれらの名前(情緒的なニックネームも)は、Michael Stone (Stoner)\*4、Billy Wright (King Rat)\*5、Johnny Adair (Mad Dog)\*6などが、Buck Alec\*7や Silver McKee\*8を含む「屈強な」マスキュリティの大衆的表現だった、かつての街頭の強者たちと置き換わった(Sugden, 1996)。Eoin McNamee の小説『甦る男 Resurrection Man』(2004)は、ロイヤリストの暴力集団(いわゆる「シャンキル・ブッチャーズ Shankill Butchers」)の流血の活動を小説化したのだが、これらの男たちは、他の人々に「かれらが突然の暴力と結びつく」手段を示したのだった(p.27)。1970年代と80年代は、暴力的な男たちによい時代だった。かれらは、「お気に入り、洞察力のある・・・信仰のディフェンダー」(p.145)として、自身の緊密に結びついているコミュニティの多くに尊敬されていた。確かに、この時代多くの若い男性は、例えば地元サッカーチームの支援者は、民兵組織を英雄視していた。ロイヤリストの暴力活動を賞賛する歌がテラス[サッカーの屋根なしの立ち席]では歌われていた(Bairner, 1999)。

あるタイプのマスキュリティから別のマスキュリティへの移行が、とりわけ製造業の衰退によって引き起こされた、マスキュリティの危機へと幾分かは関連しているとしても、それはまた、アイデンティティが常に(あるいは少なくともそう感じられる)脅威にさらされている政治的なコンテクストにも置かれているにちがいない。Steve Bruce (1992:7) が記しているように、アルスタープロテスタントは、「16-17 世紀にアイルランドの北西に定住したスコットランド人(いくばくかのイングランド人)の子孫が圧倒的である」。Bruce によれば、「移住者は異なる『人種』であり、異なる宗教をもち、先住民であるアイルランド人との経済的な競争にあった。このことが意味するのは、2つの集団の関係は常に距離を保ち、定期的に交戦状態へと落ち込んだということである」(p.7)。アルスタープロテスタントの人々が北アイルランドの分断の後にもそこに止まることを執拗に求め、かつ経済的優位に立つことに固執することによって、この状況が 20 世紀においてより強調されたといえるだろう。どちらも、アイルランドナショナリズムと製造業の衰退のそれぞれから生じる脅威にますますさらされていたのである。詩人で批評家として Tom Paulin は、彼自身がアルスターのプロテスタントであるが、「未来のない小国で成長するというのは奇妙なものだった。すべての根源はカルバン主義だ。迫害される存在であるという感覚、選ばれたマイノリティの一員であるということ、これらがより複雑な迫害をますます成長させているんだ」(McKay, 2002:296)。この状況においてもっとも打撃となった結果の一つは、中核的な信仰をはっきりと守ることを表現することがますます難しく、不可能になってきたということだ。それゆえ、Tom Nairn のアルスタープロテスタントについてのいくぶんかヒステリックな描写、「ろくでなしの幽霊の舌っ足らずな息子たちの特殊な一団」が説明できる(Nairn, 1981:233)。これは、シ

---

\*4 UDA の軍事部門であるアルスター自由戦士 Ulster Freedom Fighters (UFF) の元リーダー。1988 年ミルトウン墓地で IRA メンバーの葬儀中に乱射。3 名の殺人、60 名以上の傷害。和平合意後に 2000 年恩赦。アーティスト。2006 年ストーモント議会で武装して乱入。係争中。]

\*5 UVF に参加。後にロイヤリスト義勇軍 Loyalist Volunteer Force (LVF) のリーダー

\*6 UFF の元リーダー。

\*7 Alexander Robinson, 1902-1995, ボクサー、アルスター特別保安隊 USC に所属。

\*8 Patrick McKee, 1926-1990 年代に死亡

ヤンキルロード Shankill Road<sup>\*9</sup>生まれのアーティスト、Dermot Seymour の遠慮のない言葉とほとんど同じである。

「プロテスタントであるということは、僕にとって、思考することが許されないという意味で、首から上を切り取られているようなものだ。何に対しても個人的な考えを持つことは難しい・・・思考が困難であるということは、多くの奇妙で極端な行動を生んでいるんだ。シャンキル・ブッチャーズのようにね」(McKay, 2000:302)。

おそらく、このことが Geoffrey Bell (1976:11) を次のようなコメントへと導いた。「普通の基準では、北アイルランドのプロテスタントの振る舞いは奇妙だ」。現在では、このことは、政治的、経済的変化の結果であると宣言されるようになったといえるだろう (Bairner, 2005a)。したがって、Steve Bruce によれば (1994:39)、「アルスターユニオニストの近年の歴史においてまずもっとも明らかな特徴は、置き換えである」。このことは次に「安全から危険性へ下降」(p.40)と「不当であるという感覚」(p.60)へと導いたのだった。特権的な集団はそのコントロールの及ばない勢力によって特権の基盤が脅威にさらされていることにますます気づいてきた。それゆえ、ロイヤリストの受刑者のタトゥー (Bairner, 2001) やロイヤリストのフットボールファンの歌は、称賛と同時に、助けを求めるものや、まれではあるが承認を求めるものがあった。サッカーのほかの場所では、アルスタープロテスタント男性たちの葛藤するアイデンティティ contested Identity の顕著な例証は、ジョージ・ベスト (George Best) の人生と時代を検討することで与えられる。ベストは、長期にわたるアルコール中毒とその直接的な結果、2005年11月25日に亡くなっている。

#### ジョージ・ベスト RIP (安らかに眠れ Rest in peace)

ジョージ・ベストは、そのキャリアの頂点では疑いなく世界でもっとも偉大なサッカー選手の一人だった。さらに、時期尚早に終えられたキャリアと能力を棒に振ったという点に関して、ベストに言及する人々は、彼がほぼ 750 試合のプロのゲームに出場したことを忘れていて、また、他の世界的名選手でも、とりわけフォワードの選手としては、長期にわたって最高のパフォーマンスレベルを維持することに成功した選手は、ほとんどいないという事実を無視している。さらにいえば、フィールドにおける疑問の余地のない才能の発揮と同様に、ベストは、とりわけ試合から離れたところでの浪費的なライフスタイルによって、広範なメディアの注目を集めたセレブリティであった。

ベストは 2005 年 11 月に彼の生まれ故郷であるベルファストに埋葬された。葬儀に参列した人の数を数えることは困難であり、西ベルファストの通りや北アイルランド議会のあるストーモントの広場に集まった人々は、予想されていたよりも少なかったとはいえ、ベストの葬儀は、1981 年にハンガーストライキによって死亡した IRA [Irish Republican Army アイルランド共和軍] のボビー・サンズの葬儀以来、疑いなくベルファストにおいてはもっとも大きなものであった。ストーモントの広場におけるセレモニーは、アルスターのプロテスタントの労働者階級と、ショービジネスの「スターダム」の現代のカルトとアルスターの古代の部族のカルトによって満たされていた」と Bryan Appleyard (2005) によって描写されたように一珍しい混合であった。そしてそれは、おそらく、ジョージ・ベストの人生における中心的な二面性を完璧に捉えたものであった (Bairner, 2006)。

---

\*9 西ベルファストのプロテスタントが多く住む地域。労働者階級が多く住む地域でもある。

この講義でのここでの目的は、すでに公表した2つの研究 (Bariner, 2004; Bariner, 2005b) から発展させ、ベストの葬儀においてみられたように、特に世界的に偉大なサッカー選手の一人と彼の母体となる文化 (parental culture) の関係について焦点をあてることである。簡単にいえば、ここでの主要な関心は、アルスターのプロテスタント男性としてのジョージ・ベストにある。このために、この議論の大半はベスト自身に集中するが、この講義ではまた、アルスタープロテスタントとアイデンティティ形成、とりわけマスキュリニティの社会的構造の関係について全般的なコメントする。さらに、アルスタープロテスタントの別の「セレブリティ」、ロックスターのヴァン・モリソン (Van Morrison) と元スヌーカー世界チャンピオン\*10、アレックス・ヒギンズ (Alex Higgins) である。ヴァン・モリソンの伝記作家は、次のように述べる。「彼の社交技術は遙か昔に失われてしまった。(そのため彼には) 全く見慣れないやり方で動いている世界で機能することを強いられていた」(Heylin, 2002, p.496)。このモリソンの描写が同時にアルスターのユニオニスト全般に全く当てはまる、さらにはとりわけその男性メンバーに当てはまるかもしれないと述べるのは、過度に架空の示唆ではない。とりわけ、マスキュリニティの危機がしばしばコントロールやステータスの欠如に帰されてきたという理由からだ (Bairner, 1999; Bairner, 2001; Segal, 1999)。

研究者や知識人がジョージ・ベストへ注意を向けだしたのは、つい 2000 年以降のことである。彼らが行った研究が教えてくれるのは、ジョージ・ベストについてよりも、デイビッド・ベッカム[サッカー]、タイガー・ウッズ[ゴルフ]、マイケル・ジョーダン[バスケットボール]などのセレブリティや、一握りのその他のスポーツスターのことである。Cashmore (2002:102) がベッカム研究で記しているように、「この時代のどんなサッカー選手もベストと同じような注目をほんのわずかででも得ることはなかった」。Giulianotti と Gerrard (2001:135) によれば、「ベストの名声は、個人主義の新しい労働者階級の夢や、たやすい消費、華々しい移動性を賛美した」。

しかしながら、社会階級と急速な社会移動から生じる諸問題の関係が明らかにジョージ・ベスト物語の重要な要素である一方で、同時に次のことを認識することが重要である。すなわち、どの程度、個人的な物理的環境の諸側面と、階級それ自体が相互の作用しあうか、という点である。1950 年代のベルファストで労働者階級のコミュニティにおいて成長する経験、あるいは 1970 代のイングランド北西で、あるいは 1980 年代のエセックス州で、そしてその後裕福になりアイドル化されることはおそらく比較されうる。しかし、ローカルで一時的個別主義 particularism (例えばアルスターのプロテスタント男性であること) に根づいており、同時に、それほどでなくても影響力のある、重要な相違を認識するように努めなければならない。

その他大勢の議論を呼ぶメディアサッカースターのように、ベストが、彼の場合は労働者階級の出身というルーツや誕生地から生じる、社会的混乱 social dislocation の犠牲者であるということは、否定できない。ベストの場合、彼の母体となる文化による混乱の結果に冒されていたということが議論されうる。カソリック・アイルランドとの近しい関係がよく知られているマンチェスターユナイテッド\*11ではアルスタープロテスタントであることによって、また、アイルランド系のカソリックが通例、世界

---

\*10 スヌーカーはビリヤードの起源といわれるキュースポーツの一つ。

\*11 サッカーのイングランド・プレミアリーグのチーム。

のどんな場所に行っても愛着の強いつながりを形成するのに、アルスタープロテスタントの移民は、しばしば社会的原子論を運命づけられる、そのような世界を受け入れなければならなかったということによって。すべてのアイデンティティが社会的に構築され、多義的であると見なされる一方で、社会的混乱は葛藤するアイデンティティのある特定の形式の条件を作り出す。母体となる文化からの部分的分離のゆえに、ベストは、ヴァン・モリソンやアレックス・ヒギンズのように、もっとも偶発的でそれゆえ壊れやすいアイデンティティの側面をより明白に露呈したということ、ここでは示唆するだろう。

Andrew Parker は近年、ディビッド・ベッカムの心理学に基づいて理解しようとした初期の労作をさらに展開させた(Parker, 2004)。メディアスポーツスターの人生の軌跡を理解しようとする心理学コースを始める必要はないが、私たちが扱っているのは、おおよそ似たようなタイプの人々の一群であり、それらの人々は等しい抑圧にさらされているし、同じようにそれらに反応する傾向にある。考えられているメディアサッカーの人生を仮定するよりも、もっとも広義の意味において、個人の人生の重要な事実を把握する必要があるということは、確かに議論できる。彼らに立ちはだかる抑圧は似通ってるだろうが、スター自身は必然的に多様であるし、彼らの子ども時代について考える以上にこのことがもっとも明らかになるところはない。

### Belfast Boy(s)

ベスト(1991:5)が Ross Benson とともに書いた最初の自伝に記録したように、彼は 1946 年 5 月 22 日にベルファストに生まれた。「確固とした、労働者階級の、宗教的にはプロスタントで、信仰においては立派で誠実な家族のもとに」。Joe Lovejoy(1999:9)は、同様に記している「ジョージ・ベストは、確固とした労働者階級の経歴のもとに、すなわち自身がそうであることに非常に興味を持っている長老派教会のもとに生まれた」(筆者強調)。北アイルランド人社会を支配するラベリングに比較的馴染みのない者だけが、それらの事実がひょっとすると何の利益もないと想像できるかもしれない、とりわけ主要な関心がアイデンティティの構築と主張である場合には。

「おまえは誰だ」という問は、常に問われる。直接ではなくても、人々がこれらの関係を数え切れなほど異なる目的によって「他のやり方」で交渉するのだ、ロマンティックなものから残忍なものまで多岐にわたりながら。Lovejoy(1999:15)は、ベスト家を次のように描いている。「完全に非政治的な」敬虔な家族であり、「アルスターのセクト主義に関連づけられたどんな偏狭な考えとも無関係な」自由長老派として。このことはベスト自身の説明からすると少々食い違っている。彼の後年の伝記では、ベストは次のように断言している(2002:32)、「宗教で悩んだことなど一度もなかったし、誰も私の家族を偏狭だと呼ぶことはできない」。しかしながら、彼は付け加えている、「もし君がプロテスタントだったら、私がしたように、オレンジオーダー Orange Order<sup>\*12</sup>に参加しただろうし、私の父や祖父のどちらもローカル支部の名士だったんだ」。この事実はもちろん、すべてのアルスターのプロテスタントがオレンジオーダーに参加していたということではないが、Sam Hanna Bell の小説、The Hollow

---

\*12 プロテスタントの友愛会。オレンジ公ウィリアムが、1690 年カソリックのジェームス 2 世を破ったボイン川の戦いを祝い、毎年 7 月 12 日にパレードを行う。ベルファストではカソリック地域を通るために、深刻な抗争が度々生じている。

Ball(1961) に強烈に描かれた点であり、そこでは若いサッカー選手を中心に物語が展開していた (Bariner, 2000)。確かに、ベストは(2002:33)認めていた。子どもの頃でさえ、7月12日のオレンジオーダーのパレードは、「セクト主義のお祭り」に位置づけられていた。さらに、ジョージ・ベストは北アイルランド問題\*13が激化する以前に成長したのだが、彼はセクト主義の緊張の初期の時期を意識していた。その緊張とは、明らかに平和な社会の表面のすぐ下に潜み、1960年代後半には致命的な結果を伴って全面にでてくるであろう緊張であった。

たしかに、ベストは、彼が11プラスで合格した試験の後で、Grosvenor 高校をやめてそのかわり Lisnasharragh Intermediat(高校)で教育を終えた、いくつかある理由の一つとして、セクト主義に言及している。ベストによれば(2002:32)、彼は常にこのグラマースクールの通学や帰宅の際にセクト主義のいじめにあっていた。なぜなら、「Grosvenor 高校はカソリックエリアの中にあり、他の学校の生徒たちは、たとえば Sacred Heart[聖心会:カソリックの女子修道会]や他の学校だが、プロテスタントである私が着ている制服からそれが[プロテスタントの学校に通っていること]分かるのだった。ベストがまた Grosvenor での短い在学を不幸なものとした他の要因をあげていることも付け加える必要がある。新しい学校が少し遠くにあったことがあげられる。彼が住んでいた Cregagh からの幼なじみのだれも一緒ではなかったし、とりわけ推測であるが、新しい学校において優先されるスポーツはサッカーに対してラグビーであったこともあるだろう。ベストは記している(1991:14)、「直接的ではないけど、私をサッカーへ導いたのはベルファストの宗教的な障壁だった」。このことが多少大げさかもしれない一方、若いベストがベルファストや北アイルランドのより一般的な宗教的属性が重要であるということを知りながら成長したということは疑いえない。

おそらく間違いなく、宗教上の相違は、ジョージ・ベストの子どもの頃には、その以前やそれ以降すぐに再び激しくなるほどには、北アイルランドではそれほど重要ではなかった。彼が記しているように、「北アイルランド問題はまだ始まっていなかったし、Cregagh 団地、私が育った広い地域であって、カソリックもプロテスタントも隣接して生活していた。そしてそれをそれほど深くは考えていなかった」(Best, 1991:13)。彼は思い出している。彼の母親の友達のカソリックであった。けれども、また彼が記しているように、それでも「誰もが自分が何処に所属しているのかは知っていた」(Best, 1991:14)。

注目すべきことに、Jimmy McIlroy という1931年生まれの北アイルランドのサッカー選手(プロテスタント)が1960年に記した自伝の中で全く宗教的分裂について言及していない。現代のオーディエンスには、このことは驚くべきこととおもわれるかもしれない。McIlroy が育ったのが Lambeg というオレンジ・オーダーの伝統と結びつき、とりわけ多くのオレンジオーダーのデモンストレーションの時に大太鼓が大きく演奏される地域であることを考えるならば。

確かに他の北アイルランド代表選手、1938年生まれの Derek Dougan は、自伝の中で遙かに率直に宗教やセクト主義への態度を表している(Dougan, 1972)。McIlroy が宗教や政治的分割について言及していないことは、彼がもっぱら排他的なプロテスタントの環境において成長したという事実

---

\*13 通例、1960年代後半から聖金曜日合意が結ばれた1998年頃までの紛争を指す。

が一部では反映しているかもしれない。カソリックの「他者」はほとんど問題ではなかった。どの点から見ても、単に存在しなかったのだ。しかしながら、また、次のことも記さなければならない。すなわち、McIlroy が若い時代を過ごしたのは北アイルランドの比較的静かな時代でもあった。ジョージ・ベストがティーンエイジャーとなるときに状況は変化し始めたばかりだった。最後に、次のことが加えられる。すなわち、記憶は私たちに錯覚を起こさせる。ヴァン・モリソンの子どもの頃の「彼らとわれわれ」という問題にさらされていたという回想が曝露するように。1945 年生まれのモリソンは、1986 年の彼が育った西ベルファストを思い出している。

「西ベルファストは、完全にプロテスタントの地域だった。数人のカソリックしかいなかった。しかし、・・・何の問題もなかったし、どんな衝突などもなかった」(Heylin, 2002, p.11 に引用)。

ふたたび、この幸せな無知の空気には驚かされる。それは、多くのアルスターユニオニストが盲目的に保持された印象と完璧に調和している。その印象とは、かれらの「ちっちゃな国 wee country」は、何人かの共和国主義者\*14と左翼のシンパが 1960 年代末に諸問題を作り出そうと決心するまでは、何の問題もない平和な場所だったというものである。しかしながら、非常に明白なことは、モリソンやベストのような若いプロテスタントが、ある程度北アイルランドのカソリックコミュニティから仮想的に隔離されて育ったということである。カソリックについて知ることは、もう少しで現れるところだった。なぜなら、そのとき、彼らに名声と富とそして多くの人生の苦悩をもたらす経歴にそって、最初の暫定手段をとったのだ。

## アイデンティティの問い

もちろん、北アイルランド紛争は、単にあるいは第一にも宗教の問題ではない。ナショナルアイデンティティは、重要な問題である。この点において、ベストの物語は、多くの人々、北アイルランドの親英国伝統のもとで育ち、だが部外者からみれば他のアイルランド人(系)とほとんど区別できないそのような人々の物語に、似通っている。彼の最初の妻、Angie Best (2001) は、何度も彼のアイリッシュネスに言及している。いわく、「かわいいアイルランド人」(p.6)、「酔っぱらいのアイルランド人」(p.19)、「荒っぽいアイルランドの魅力」(p.19)、「チャーミングなアイルランド人」(p.56)。ベストが回想しているのは(2002:302)、1984 年に飲酒運転で逮捕した警察官が、彼を「とるにたらないアイルランド人の間抜けめ。おまえはくずのアイルランド人だ。アイルランドの汚れがまた見つかった」と呼んだことだ(Best, 2002:326)。

ベストは、Michael Parkinson (1975:61)\*15のベストの伝記で彼自身が「めちゃくちゃなアイルランド野郎」と描写している、彼のアイデンティティのこの特別な解釈に貢献している。Burchil (2002:8) は、この見解を裏付けている。Tom Jones とベストを比較し、次のようにコメントしている、「特に、これらのケルトの王子たちは、ウェールズとアイルランドのそれぞれのために酒を飲んでた」。ベストのアイルランド的な部分やや、ケルト的なもの、より分析的な用語では家系に、言及したものもいた。例えば、ジャーナリストでキャスターの Parkinson は(1975:57)、著名なスポーツライターの Hugh

\*14 リパブリカン。アイルランド共和国への北アイルランドの統合を望む勢力。IRA など過激派を指すことが多い。

\*15 著名なテレビキャスター。BBC の番組が有名

McIlvanney がベストについて述べたことを引用している。

「私は、強い自滅的な衝動が彼の性格の深いところにあるのではないかと疑っている。ケルト民族は、アイルランド人だろうがウェールズ人だろうがスコットランド人だろうが、スポーツ選手や芸術家、政治家に関わらず、つねにとても強い自滅的な領分を持ち続けている。もし地獄が存在しなければ、ケルト人はそれを発明するのではないか。時々本当にそうだったのではないかと考える。ジョージ・ベストについていえば、私はしばしば、彼が物事があまりにもうまくいきすぎると不安に感じているような印象を持ち続けている」

Parkinson は(1975:7)またこの点について追求している

「遺伝子理論について好む人々は、Anne Best(ベストの母)は生粋のアイルランド出であったが、Dick Best の家族はスコットランドからの移民であるということを知ることに関心を持つだろう。」と示唆している。あるものは確かにこの説明に含まれる生粋のアイルランド人の考えを問題にしたいと願うだろう。だが、他の点では、しかしながら Parkinson のコメントは、私たちがベストのアイデンティティについてのより複雑な真実に近づかせてくれる。アルスターのプロテスタントが、他のアイルランド人やもっと一般的にはケルトと同様に、イングランドにおいては否定される一方で、北アイルランドにおいては、彼あるいは彼女の認識されたアイデンティティはケルト的ともアイルランド的ともなりえない。たしかに、自身のアイルランド性を称賛したいアルスターのプロテスタントでさえ、自己同一化の試みに関連づけられた問題を認識しているのである。

ベルファストの図書館司書の John Gray はこのジレンマを次のように表現している、「私の想像のアイデンティティはアイルランド人である。そして私の望むアイデンティティもアイルランド人だ。しかし、全く厳密に言うなら私は北アイルランド人なのだ」(McKay, 2000:71-2)。他方で、「イングランドに行くと、そこは全くの外国ではない、でも私の国ではない」(McKay, 2000:71)。アイデンティティのことは他の多くの点と同じように、どっちつかずにとらわれていて、アルスターのプロテスタントコミュニティは、David Dunseith が「包囲されたマイノリティ」と呼んだものを自認するようになっているのである(McKay, 2000:26) —そしてそこには、家族と信仰のディフェンダーという役割に身を投じる男たちにとって、特別で潜在的に危険な意味合いを伴っている。このことはベストやモリソン、ヒギンズには当てはまらないが、彼らの「ナショナル」アイデンティティを負っている幾分か想像されたアイルランドへよりもこのコミュニティへはあてはまる。とはいえ、この三人の男たちは、様々に、アイルランドの特別な解釈に折り合いをつけようとしてきた。一方で、議論しうるが、彼らは、支配的なマスキュリティについて彼らのコミュニティにおける伝統的な理解に様々に固執してきた。

サッカー選手、あるいは一般的にスポーツ選手よりも、1960年代の北アイルランドにおける音楽は、比較的民族セクト主義の分断を超えて成功していた。広い聴衆に向けて最初にヴァン・モリソンを知らしめたバンドは、カソリックのメンバーを獲得する以前にも定期的に西ベルファストの St. Theresa ホールで演奏していた(Heylin, 2002)。たしかに、音楽経歴の多くにとって、モリソンはアイルランドの二つの主要な文化的伝統と和解しようとしてきた。ベストに関する Parkinson と McIlvanney、Burchill によってなされたものと、類似した家系的間違いを作りながら、モリソンの知人だった Hilary Sanderson は回想している、「彼は常にしきりに探し続けていた。私は彼が確かに彼のケルト的なルーツに戻りたがっていると感じた」(Heylin, 2002. p.353.に引用)。アイルランドフォークバンドであるチーフタンズ(The Chieftains)の Paddy Moloney は、もっと確信を持って語っている、「思うに・・・ヴァンは彼のアイルランド人のルーツを探していたんだ」(Heylin, 2002, p. 416に引用)。



この探求は、大部分は想像的ルーツにもかかわらず、モリソンを別のアイリッシュフォークバンドとの仕事へ導いた。すなわち、1980年代初頭のムービングハーツ(Moving Hearts)や1987年から1989年のチーフタンズとの仕事である。しかし、Morrison[という姓]の起源はケルトではないし、ましてや Moloney のように南[共和国]のカソリックのような同じく公的意味においてもアイルランド系ではない。あるいは、幾分か疑問の余地があるが、おそらく、北のナショナリストが自ら理解しているそのような意味とも異なる。実際に、アイデンティティのカテゴリーは完全に明白であるということはないので、モリソンの彼のアイリッシュネスに対するアンビバレンスはおそらく単に広範囲に見られる現象、すなわちアイリッシュネスそれ自身の論争的な性質の例である(Kiberd, 1995)。

Heylin(2002:431)によれば、「おそらくアイルランドにおいて演奏したという経験は、モリソン自身のバンドをモロニーのバンドから分離している、北と南の分断を思い起こさせるものとなった」。たしかに、モリソンの当時のバンドメンバーの一人である Arty McGlynn がどのような関係であったかが思い出している。

「・・・あれはミスマッチだった・・・俺たちはみんな北アイルランド出身だ。そして、ヴァンはとても北アイルランド人的だ・・・(だから)ツアーには緊張が培養されていた。それは、それが起こったのは初めてだったし、それらの二つの両極端な・・・とても大きな軋轢だった、それは疑いようがない」(Heylin, 2002,p.431より引用)

チーフタンズの Kevin Conneff も、同様にその期間の難しさを思い出している。「彼[モリソン]が不機嫌になるときがあった、たいていはアルコールが関わってるが、そんなときは俺は彼には近寄りたくなかった」(Heylin, 2002,p.431より引用)

アイルランド人でありながら他のアイルランド人と一緒にいると全く落ち着かない、モリソンは当時のアルスター・ユニオニストの伝統における自由主義的傾向の縮図であった。ジョージ・ベストがマンチェスター・ユナイテッドに移籍したとき、ベストはまた、旅立つところだった。その旅において、マンチェスター・ユナイテッドで表現されたアイリッシュネス(より一般的にはカソリシズム)とのコンピニーションや、スコットランド長老派教会はその後に起こる出来事に必然的に影響したであろう。

カソリックのエートスは、確実にベストのもっとも輝かしい時代を通してマンチェスター・ユナイテッドを支配していた。監督である Matt Busby<sup>\*16</sup>、彼のアシスタントの Jimmy Murphy[1940年 ダブリン生まれ]、それから選手の Pat Crerand[1939年 グラスゴー生まれ、アイルランド系。]や Nobby Stiles[1942年マンチェスター生まれ、カソリック地域で育つ。]のような選手や、アイルランド[共和国]人の Shay Brennan[1937-2000年、マンチェスター生まれ。アイルランド系。]、Tony Dunne[1941年ダブリン生まれ。]、それから短い Johnny Giles[1940年ダブリン生まれ。]らから伝えられる。作家でありジャーナリストの Eamon Dunphy[1945年ダブリン生まれ。]もまたクラブで過ごしたのは短い期間であるが、Busby がマンチェスター・ユナイテッドにそのカソリックのアイデンティティをもたらしたことを信じている。Dunphy によれば(Scally, 1998:90からの引用)、「Matt はカソリシズムを人格 character と同一視した。そして彼はその人格がプロフェッショナルスポーツの成功にとって

---

\*16 1909-1994、スコットランド人。マンチェスターユナイテッドでは1945-1969年、1970-1971年監督。

の鍵であると信じていた」。このことは確かに若いアルスターのプロテスタントにとって異質な環境であった

ベストの後に、彼が共有したバックグラウンドを持った優れた選手たちがオールドトラフォードへと続いたのは確かだ。これらには Jimmy Nicholl[1956年カナダ生まれ、北アイルランド代表選手]、Sammy McIlroy[1954年ベルファスト生まれ]、David McCreery[1957年ベルファスト生まれ]、Tommy Jackson[1970年代にマンチェスターユナイテッドで活躍、北アイルランド代表。]そして Norman Whiteside[1965年ベルファスト生まれ。]も含まれている。しかしながら、ベストは、アルスタープロテスタントだけではなくマンチェスターユナイテッドのファンにとってははるかに優れた選手だったし、今もそうだ。サポーター雑誌の投票では1990年代末まで、Eric Cantona[1966年フランス生まれ。フランス代表。]を除いて、マンチェスターユナイテッドの偉大な選手のなかでも常に第2位に選ばれていた。彼がその中の一人であるという事実は、彼と同じ宗派の人々にとってプライドの源泉となり続けている。にもかかわらず、彼の原点は、彼に敵対していた、あるいは彼がプレイしていたクラブに敵対していた北アイルランドのカソリシズムをサポートはしなかった。だが、彼が被った三重の混乱と折り合うために、どれほど巧みに、ベストは心の中で心構えしていたのか？

### 「プロテスタント(Prod)」のセレブレティであるということ

あるスポーツスターであるという苦勞を描写しながら、Whannel(2002)は、労働者階級に止まることは選択肢にはなくても、しかしながら中流階級の生活様式に編入することに抵抗したサッカースターを描写するために Critcher(1979)が定義した概念「混乱 dislocation」に言及している。Whannel(2002:51)によれば、「ジョージ・ベストは、フィールドの内でも外でも、プレッシャーに耐えるには不十分な能力、人格、バックグラウンドを持った、典型的な混乱した dislocated サッカーヒーローであった」。しかしながら、ベストの混乱は単に性急な社会移動に折り合いをつける能力がなかったことに根ざしていたわけではなかった。つまり、彼は空間的に、そしてこれは議論となるだろうが、文化的に混乱していた。最低賃金の廃止の後の数年間の多くの選手のように、ベストは、不慣れな富を相手にするという問題に直面したのだった。しかし、ベストはまた、スポーツの成功を求めて家族や友人を残してきた、若い出稼ぎの労働者でもあった。

彼の最初の妻の考えでは、「ジョージは、マンチェスターユナイテッドへ赴くには15才と若すぎた。つまり、彼は学校を終えてから行くべきだったと思う」(Best, 2001:57)。確かに、マンチェスターへの彼の最初の訪問は、ホームシックのためにたった一日しか続かなかった(Best, 2002)。もし彼が戻ることを決意しなかったら、イングランドサッカーもマンチェスターもどちらも痛手を被ったであろう。できることは彼自身の結果を思いめぐらせるだけである、混乱についての可能な他の源泉を推測的に言及するように。事実は、気がついたら母体となっているアルスタープロテスタント文化から分離していたということだった。

アルスター・スコットランド長老派教会のカルヴァン主義は払いのけるのが困難な影響をもっている。もっとも不幸なことに、それは R. L. スティーブンスンの『ジギルとハイド』の世界であり、ジョージ・ベストはおそらくその現代版である二元論の作品である。彼の最初の妻が覚えているように、「ジョージが酔っぱらっている時は、どんな場合もありえた、つまり不快で卑劣、あるいは気まぐれにも。でも素面の時は、彼は物静かで内向的だった」(Best, 2002:58)。彼の2番目の妻が語っているが、明らかに彼は激しい嫉妬にかられることもあった。彼女も認めているように、彼らの関係はドメスティック

バイオレンスの事実によって中断された(Best, 2005)。Whannel(2002:113)は、ベストの「女性の物象化」について言及し、彼のジェンダー関係へのアプローチがしばしば非難されるべきものであったことは疑いようがないとしている。たしかに、Whannel(2002:127)によれば、ベストの過失や弱点のために、彼の人生は「道徳的説教へと、つまり 19 世紀の教訓の書のように、感情のままに振る舞うこと、欲求、快樂主義やアルコールの危険性に関する訓戒へと、変化してしまったことだ」。

それにもかかわらず、ベストが選んだ人生は、普遍的な糾弾へは至らなかった。だが、明らかに彼の母体となる文化の基本的な戒律の幾分かには反目し続けていたのだ。

豊かで敬虔なプロテスタントファミリーで成長することが、多くの若者(女性も)を個人的な自信のなさを克服するためにアルコールへと引きつけている。そこには大いに予想できない結果が伴われる。この点で、ベストは、ベストを『Too Long in Exile』という歌に追放されたアイルランドの天才の一人として加えているモリソンと同様であるし、「その時代にベルファストのプロテスタントとして成長した産物」(Borrows, 2002:17)である、元スヌーカー世界チャンピオンのヒギンズとも同様である。ベストが分類される傾向にある他のイングランド出身のサッカー選手らよりもはるかに。

ヒギンズは、1949 年ベルファスト生まれ、市の南部で育ったが、ベストやモリソンらと似通ったプロテスタントの労働者階級のしつけを経験している。疑いなく彼の破滅の要因は、彼らよりもっと激しく追い払われたことが判明している。ある領域の人々からは驚嘆を引き出している。たとえば、オアシス[ロックバンド]のリーアム・ギャラガーは、次のように語っている。

「アレックス・ヒギンズについて?・・・彼はヤバイよ。稼いだ金、名誉、全部ふきとばしちゃった。すごいやつだよ。おれにもそんなことが起きないかな。ぶっとんじゃうようなさ。最高だよ。」(Borrow, 2002, p.1 に引用)

プロ・スヌーカーの比較的落ち着いた世界では、しかしながら、ヒギンズの徐々に風変わりになる態度は、不安定だとみなされてくる。アルコール依存、自殺未遂、薬物にドメスティックバイオレンスなど、すべてがヒギンズの冒険談のなかで特徴づけられるようになった。1990 年に、ヒギンズは彼の怒りを北アイルランド人のプロスヌーカー選手、ティローン県出身のカソリックである Dennis Taylor にぶつけることを決めた。ヒギンズによれば、国際大会で北アイルランドのためにプレイしているにも

かわらず、テイラーは「アルスターの赤い手<sup>\*17</sup>・・・を身につけるにはふさわしくない」からだった(Borrow, 2002, pp.276-7 に引用)。そのため彼が次に北アイルランドを訪れる機会があったら、テイラーに発砲してやると脅したといわれている(Borrow, 2002)

Borrows(Borrows, 2002:277)は、部分的にヒギンズの態度を彼の母体となる文化に言及することで説明しようと試みている。

「それは、奇妙なセクト主義者であり、公然とした非政治的産物からの特徴のない愛国主義的な故意の行動であった。いくぶんかそのような異質なやり方におちいていた。それは次のように表現されたかもしれない。彼が育ったプロテスタントの胎内へ這い戻る必要、というよりは、手に入れられるどんな武器を使ってでも攻撃を仕掛けようとする子どもじみた試みの要求」

この2つの可能な説明がお互いに排除するものではないし、ヒギンズの外の世界に対して表され

---

\*17 アルスターの旗には、赤い手が描かれている。

る彼自身の明らかに幼見的な困難性は、彼のルーツにしっかりと結びついているといえるだろう。

Angie Best(2001:7)によれば、ジョージは「驚くべき頭脳の持ち主だった、だけどそれを使う機会を全く与えられなかった」という。ジョージ・ベストと、この講義の始めに言及した、1970年代にベルファストでテロを起こした精神病のロイヤリスト殺人者たちと比べることはきわめて不愉快であるかもしれない。しかし、彼の振る舞いは、しばしば紛れもなく奇妙で過激であった。そのうえ、ベストは、アルスター・プロテスタント・コミュニティのセレブのなかでは、この点において決して唯一ではなかった。たとえば、1965年に初めてヴァン・モリソンに会った、NME<sup>\*18</sup>のレポーターの Keith Altham は、次のようにコメントしている「ヴァンについてもっとも不安だったのは、彼が不安定だったということで、そのような誰かにつきあうのはすごく難しい」(Heylin, 2002, p.x-xi に引用)。このあまり見慣れない世界の一つの特徴は、多くのアルスタープロテスタントが属する唯一の世界ではなかったという事実だった。ジョージ・ベストは、彼が少年時代マンチェスター・ユナイテッドに入るために北アイルランドを離れたとき、そのような見知らぬものさらされる似たような感情を経験したにちがいない。

### The Best of times

ベストや、彼が比較できる他のセレブリティは、北アイルランド問題が激化する以前にベルファストで育ち、生まれ故郷を離れたのは、緊張はくすぶっていたが、しかし部分的には沸点に届いたことには気づいていた1960年代の終わりであった。それらの緊張にもかかわらず、1950年代は、北アイルランドの混乱した歴史の中では、比較的穏やかな時代であった。Patterson(2002:183)が指摘するように、「態度の変更は重要な社会的発展の反映の一部であった。戦後[第二次世界大戦後]の生活水準の改善が意味していたのは、『消費社会』の到来であり、一方で伝統的定着の移動ではなくても、いくらかの情緒的な求心性を奪うものであった」。1970年代の暴力に直面したときのことを、ベストは回想している。彼は次のように書いている「[街の]通りは、ボールを蹴って遊ぶ子どもたちではなく、英国軍の兵士や戦車でいっぱいだった」(Best, 2002:173)。彼のいとこの一人は、銃撃戦の中で英国軍の銃によって殺されたと考えられている。しかし、いろいろな点で、これがベストが逃げだそうとした世界だった。もし、彼が10年後に生まれていたら、どのような結果になったか誰がわかるだろう？しかし、結果としては、ベストが気づいたことは、もっとも厳格なコミュニティ関係の活動家でさえ喜ばすやり方で、北アイルランドについて話したり書いたりすることは、比較的容易であるということだった。

このことは、ベストのコミュニティ間の交流の要請の重要な一面へと導く。彼は次のように述べている「教義や肌の色は私にとっての問題になったことは一度もなかった。ただ私はそれぞれが信じているものを信じているし、誰かを傷つけない限りで、信じているどんな宗教的政治的ドグマであってもそれは悪いことではない」(Best, 2002:32)。彼の生まれた場所について特に言及して、彼は、「ベルファストの出身であるということに非常に無邪気になる必要があるかもしれないし、そこには唯一一つの宗教が悪いことをしていて、自分が信じている方はそうではない、と信じる必要があるかもしれない。それにはよい面も悪い面もあって、その2つが戦争を引き起こす、そしてそれが僕がそこにいた

---

\*18 New Musical Express。70年代に非常に影響力があった音楽雑誌。

間に体験したことなんだ」(Best, 2002:223) ベストは、うわさによれば、選手時代、共和国主義者から死の脅迫を受けている。他方で、ロイヤリストは、彼が 1984 年に飲酒運転のうえに、警察官を暴行したかどで刑が加重されたときに、刑務所から脱出する助けを申し出たとされる。ベストは申し出を断り、国家形成の時から北アイルランドの生活を支配し続けている民族主義的セクト主義の分断に巻き込まれることを、一貫して避けた。ヒギンズの Dennis Taylor との対決を特徴づけたような、セクト主義の嫌がらせへの転落はベストにとっては当てはまらなかった。

そしてまた重要な認識は、この点においてベストが唱道していたことを実行しているということである。個人的なレベルでは、サッカーにおける彼の近い友人の多くは、Pat Crerand や Shay Brennan を含めて、カソリックであった。さらに、スポーツポリシーの点からは、彼の全アイルランド代表チームへの要求は、極端に世界教會的にみえる。この個人的なカソリックとの関連は、また、私たちをベストの個人的アピールについてのいっそう論争的な理論へと、そしてまた彼のアルスタープロテスタント男性であることへの積極的な関与の複雑さへと導いている。

このことを議論するのに、アイルランドが飲酒によって特徴づけられる国であることをほめかさずにすませることは難しい。まぎれもなく、ベストの飲酒の習慣は、彼のカルヴァン主義的養育と関係していることは一部は説明のつくことだが、より一般的には、少なくとも比較的罪悪感のない表現で、アイルランドのカソリック社会とつながりのある生活様式へと彼を接触させた。アイルランドのカトリシズムは禁酒を擁護しているが、近代では、このことは滅多に、自由長老派教会を思いださせる反アルコールロビーのように、耳障りだったり、有力だったりしたことはなかった。より重要になっているのは、ディヴィッド・ベッカムによる「新しい男性」や「ゲイ・アイコン」といった正統から逸脱した力だ (Burchill, 2002; Cashmore, 2002; Whannel, 2002)。しかし、ベストはまた、「心に秘めて hauds it in」教会に通う禁酒主義者というアルスター・プロテスタントのステレオタイプを選び、そしてそれをひっくり返して、逸脱した態度をとり続けた (Bairner, 2004)。多くのアルスター・プロテスタントが、人前では見知らぬものを警戒し潔癖であるように抑制されてみえる一方で、ベストはしばしばステレオタイプを無視していたか、少なくともそのように見えた。繰り返し、彼は、そしてそのことについていえばモリソンやヒギンズもまた、彼らが言う、伝統的に彼らの計略や模倣と見なされてきた、もっとも純粋な自己欺瞞の形式である、「正統な」アイリッシュを克服していた。さらに、スポーツ選手が招待される晩餐会における難しい質問を巧みにさばく事に関して、ベストとアレックス・ヒギンズと比べると、ヒギンズの伝記作家は次のようにコメントしている。「ベストは、そのシチュエーションを取り扱うのに十分な魅力をもっていたが、他方でヒギンズは暴言を吐かずにはいられないように感じていた」(Borrows, 2002:334)。しかし、このことのすべては、単にジョージ・ベストの公的な顔について集中している。ベストが酒を飲み、彼の様々の社会的混乱と格闘しながら座っているとき、彼は、どれほど葛藤したアイデンティティと気楽につきあっていたのだろうか。

死に際しても、ジョージ・ベストの人生がどのような結末を導いたかについての批判がすぐに表明された。Marcel Berlins (2005:7) によれば、「暴力、酒に酔って女性を殴ることなどのベストの晩年の告白は、私たちに常に、彼のかつての神のような姿と、彼が晩年の哀愁に満ちた姿とを対照することを私たちに強いながら、何年も私たちの前に見せつけていたのだ」。より厳しいコメントは Carole Malone (2005:31) が、ベストの死に対する人々の反応に言及しながら、次のように示している。「この、自身の死に 100% 責任があり、妻に暴力をふるってきたアルコール依存症の人物への、国を挙げての悲嘆の露出は、正直に言ってばかばかしい」。ジョージ・ベストの人生における多くの困難

は、たいていの場合、確かに彼の労働者階級、アルスタープロテスタントという背景に結びついてた。彼は、少なくとも、3つの点で、社会的に混乱し続けていた。それは、階級、誕生の地、そして、象徴的なレベルでは彼の母体となる文化であった。

しかし、私たちがジョージ・ベスト、ヴァン・モリソン、アレックス・ヒギンズをどのように理解すべきかという点で、次のようにいうことはフェアであろう。つまり、かれらは決してアルスタープロテスタントの遺産の多義性から、完全に逃げ出すことはできなかった。ベスト自身は、アイルランド人であるが、いくぶんか他の人がアイルランド人であるのは異なる仕方で、アイルランド人であった。トレーニンググラウンドではハードワークでしられた、酔っぱらいであった。彼は、内省的な性質に陥りやすく、しばしば暴力的な、(たしかにアレックス・ヒギンズよりもヴァン・モリソンよりもはるかに)魅力的な男性であった。そして、常に女性にとって魅力的であり(彼にとっても彼女たちは魅力的で)しかし、彼らと関係を持つことが非常に困難を伴うようにみえる男であった。彼のアイリッシュネスについての不安定さは、紛れもなく彼の母体となる文化に共通のものである。彼のアルコールとマスキュリティの特有な表現との関係が、同様に彼の家系に結びついていると主張することは、より推論的である。

しかし、少なくとも、これらの示唆を念頭において、彼を憎めないアイリッシュの人でなしか、あるいは道徳破綻者として描写する、ジョージ・ベストの表層的な読み物から先へ進むことができる。これは、比較的早い時期に彼の3つの混乱によって引き起こされた挑戦に直面することを余儀なくされた男であった。非常に人気のあったサッカー選手として、彼は多様な方法でこれらの挑戦に立ち上がった。個人としては、しかしながら、ジョージ・ベストであるという重責と、これが暗示する葛藤するアイデンティティに取り組むという重責は、最後には彼が克服できなかった乗り越えられない障害であったことが示された。

もしこれらのセレブリティの一人でも10年後に生まれていたら、彼の人生の軌跡は非常に異なったものであっただろう。これはある時代に生まれた、全ての労働者階級のプロテスタント男性が、ロイヤリストの暴力活動に関わっていたと暗示するわけではない。しかし、単に彼らが何になったのかという証拠に基づいて推論すべきではないし、彼らの誰もが「屈強な男」のこの新しい世界へと引き込まれていく可能性を持っていたと仮定することもできない。結局、伝統的な「屈強さ」の特質を実演する能力は、本質的な必要条件ではなかった。

William Alexander Ellis Giles – 「Billy」 – は、1957年に西ベルファストの労働者階級プロテスタント家族に生まれた。1982年、Gilesはカソリックの同僚 Michael Fay を殺害した。彼は犠牲者の頭を後ろから撃ち、死体を車のトランクに押し込んだのだった。彼は逮捕され、自供し、無期懲役を言い渡された。私が彼と知り合った1990年代、まだ刑務所にいたが、小柄で物静かな礼儀正しい男だった。1997年、彼は釈放された。1998年9月25日の朝、彼は首をつった。彼の遺書には、次のように記されていた、「私の精神は病んでいる。銃が暴発した82年11月18日のあの瞬間に。遅すぎた(Taylor, 1999:10)。別な苦悶したアルスター男性は、ベストのように、「屈強な男」という考えの人々はほとんどおらず、Billy Gilesは彼の悪霊と格闘し、敗れたのだった。

**おわりに:「新しい」アルスターのプロテスタント男性に向けて?**

ロイヤリストの民兵組織は、自由に使える裸の拳の代わりに銃を持つ、労働者階級のプロテスタ

ントコミュニティ内部の「屈強な男」の新種の代表だった。最近の広範な民兵組織の暴力の停止は、一時的にせよ恒久にせよ、新しいアルスタープロテスタントのマスキュリティ構築にまぎれもなく多くの余地を与えてきた。

どの職業も職場も、現在では生得的なプロテスタントとして描かれることはできない。例えば警察行動は、徐々に平等になりつつある立場で、どちらのコミュニティのメンバーによっても担われている。民兵組織は、かつて彼らが享受した、ほとんどどんな疑似政治的レゾナントも失った。多くが、多くが平和構築やコミュニティ交流の調停へ大きな貢献を果たしてきている。(Shirlow and McEvoy, 2008)。北アイルランド問題が激化していた時代の「屈強な男」を取り巻く神話と深く結びついていた人々は、彼らのコミュニティにおいてさえ、今では犯罪者にすぎないものと見なされ、加えるなら、第二次世界大戦直後の時代の先任者に属していたほとんどの神話的評判は欠落している。

それにもかかわらず、この講義で示した証拠が提示しているように、自ら選択した職業において偉大な世界的成功を達成した、アルスタープロテスタント男性たちにさえ、サッカーフィールドにおいて、スヌーカーテーブルのうえで、そしてステージでのスキル以外では、他者と交流に長い間苦労し続けた。もし、一般的な「マスキュリティの危機」のようなことがあるなら、「アルスターユニオニズムの危機」に付随して、彼らの場合、事態はいつそう悪化してきた。後者は、多くのものにとっての言い訳、暴力を行使し続けた男性たちの諸行為の正当化を務めてきた。もし(そして私はこの「もし」を強調するが)アルスターユニオニズムの危機が部分的にでも解決が進んできているとすると、少なくとも短期的には、「マスキュリティの危機」それ自体は、寡黙さ、不合理な振る舞いや暴力的諸行為についての十分に許される説明にはなっていない。(笹生心太)